



Title	ツングース諸語その他に関する池上二良先生の功績
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方人文研究, 5, 193-204
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49317
Type	bulletin (other)
File Information	14journal05-kazama.pdf



[Instructions for use](#)

〈シンポジウム報告〉

ツングース諸語その他に関する池上二良先生の功績

風間伸次郎

東京外国語大学大学院総合国際学研究所

0. はじめに

本稿では、まず1節において、池上先生の研究の全体的な傾向について考え、次に2節においてツングース諸語研究における池上先生の具体的な功績について考える。

1. 池上先生の研究の広さと深さ

1節では、先生の 1.1. 歴史的関心（通時的な広がり）、1.2. 地域的関心（空間的な広がり）、1.3. 研究の姿勢（精密さと広さ）、について、順にみてゆくことにする。

1.1. 歴史的関心（通時的な広がり）

池上先生は常々歴史的研究の重要性と必要性を説かれていた。下記の記述はその意を過不足なく伝えていると思うのでこれを引用する。

北方地域の言語の研究は、今日特にその記述的研究（共時態研究）がさかんに行われていることが注目される。これは他の研究の基礎ともなる。しかし、言語研究において、過去に起きた言語に関する変化の解明（通時的研究）も、重要な研究分野であろう。今、シベリアの諸言語について歴史的研究を行おうとすると、その史的資料がまず必要となる。その言語の古い語彙などはかなり残存し、史的資料として貴重である。ただし、これらは古くとも十八世紀・十七世紀のもので、それより古くさかのぼるものを見出すことはむずかしいようである。したがって、この地方の言語の歴史研究に大きな展開を期待することは無理かもしれない。

しかし、比較言語学の基本方法である比較方法は、この地方の言語にも適用できよう。たとえば、ツングース諸語についても適用される。また、チュクチ語、コリヤーク語、アリユートル語、イテリメン語の相互の比較研究に、さらに、これらの各言語内の諸方言の比較研究にもその適用が期待される。また、内的再構の方法は、比較方法に比べるとその確実性が劣るが、注意しつつ適用することはできよう。

今後二十一世紀の通時態研究は、今日の進んだ記述的研究（共時態研究）によって得られた各方言の詳細なる資料を基礎に置くことができ、一段とすぐれた成果をもたらすだろう。

津曲編著（2003）の序文

池上先生の通時的研究を見ると、ツングース諸語内部の比較研究にはじまり、アルタイ諸言語の系統、日本語とツングース諸語やこれを含むアルタイ諸言語との比較にまで及んでいる。後進の我々は上記の言葉を深く心に刻んで研究すべきであろう。ただ学会の趨勢や研究の現状は先生の予見とはまだ遠いところにあるように感じられる。

史的資料について、もちろん池上先生はこれを丁寧に探索・収集し、研究・公開している。書誌学的な問題点にも注意を払い、利用可能なあらゆる資料にアクセスしようとしていたことがわかる。池上先生の資料収集の熱心さを示す記述を以下に紹介したい。

筆者が使用した漢清文鑑の東京大学蔵本（小倉新平博士旧蔵本）には旧稿ですでにふれたように一

丁落丁がある。したがってその後韓国の延禧大學校からその複製本が刊行されたが、やはりその一丁を欠いている。本書は稀覯本であり、ほかには知られているかぎりパリの東洋語学校図書館 (Bibliothèque de l'École Nationale des Langues Orientales Vivantes) の所蔵の一本があるだけである。筆者は昭和 36 年四月同校をたずねてその一丁すなわち巻一二の第五六丁を写真にとってもらうことができた。いまここに複製してかかげ、同書を研究につかわれるかたがたの便に供したい。なおこれを発表することができるのは、(中略)・・・の御好意と御助力によるものであり、ここに記して感謝の意を表したい。

池上 (1999 [1963] :47)

筆者は 1960 年ドイツ滞在中たまたまハラソヴィツ書店書目でウランバートル刊本を知ったのであるが、同年 12 月ケルンに W. Fuchs 教授をおたずねし、この刊本のことにはなしがおよんだとき、同教授はボン大学の W. Heissig 教授のところで入手した 1 冊をすでにみられたが自分がこれまでみた写本とは書体がことなることをはなされた。なお筆者がパリ国立図書館ではじめて本書のパリ本をみたのは 1961 年、ウランバートル刊本を入手できたのは 1962 年であった。

池上 (1999 [1965] :224)

ある時、お宅をお邪魔した折に、記憶のため筆者が自分の本のページを折ったところ、先生が「私はそのようにするのは好まない、」とおっしゃったのを思い出す。北大の言語研究室には、池上先生がそれまで買い揃えてこられた言語学の重要な文献が揃っていた。あの書籍を予算の範囲でその都度注文することもなかなかたいへんなことであつたらうと、津曲先生がおっしゃっていたことを思い出す。我々後進にとっては極めて重要なお仕事であった。筆者も北大言語に来たばかりの時は、棚に並ぶたくさんの本を見て勉学への動機が高まったことを思い出す。本を大切にされた池上先生の恩恵にあずかってきたことを感謝したい。

1.2. 地域的関心 (空間的な広がり)

池上先生の時代には、ロシアの小村に入って現地調査を行うことは不可能であった。下記の文には、「外国人には許されていない、」という記述が実に三度も現れていて、その無念さが伝わってくる (下線は筆者による)。

さて現に今日話されている言語を研究する場合は、その話し手にじかに接してそのなまの発音を通して研究することが当然必要となるわけで、ソ連内のツングース語について直接その話し手に当たって研究することは、なかば不可能と考えながらも、なおすてきれぬ長年のわたくしのゆめでした。しかしソ連ではツングース人などの少数民族の住むようなシベリヤ奥地へ入ることは外国人には許されていません。ソ連へ行くことになった時も、そのためやむをえずレニングラード教育大学でツングース人学生について調査研究する計画を立てました。(中略) 言語を研究する方々には専攻する言語にはじめて接したときの思い出をそれぞれおもちでしょうが、わたくしももう 20 年もまえですが、ツングース語の一つオロッコ語の話し手であるカラフト引き揚げのオロッコ族出身者をさがしに北海道にわたり、函館をふりだしに方々さがしまわってやっと一週間めぐらいにオホーツク海に面したサロマ湖から一里ほど山へ入った放牧地の番小屋で9月の夕暮れどきはじめてオロッコ婦人からオロッコ語をきくことができました。その思い出は忘れることはできませんが、いままた長年の願いであったシベリヤのツングース語をきいたことは感慨深いものでした。(中略) 今回のわたくしの調査はわずかでしたが、北方言語について日本人がソ連で実地調査を行ったあるいは最初かもしれません。そしてそれはソ連における少数民族の言語、民族における日本人の今後の調査の可能性を

示唆するものと考えています。しかしこれを実現するためには、こちらの公的機関を通して向こうの公的機関と連絡をとることが必須だと思います。(中略) つぎに8月にシベリヤをすこし旅行したことをお話しします。ソ連では外国人は一般には限られた都市しか旅行が許されず、シベリヤの奥地で現地調査をするようなことはとてもできませんが、とにかくシベリヤの地をふんでみたいと思い旅行しました。モスクワからヤクーツク、それからイルクーツク、ウラン・ウデ、ハバーロフスクを全部飛行機でまわってモスクワへもどりました。ハバーロフスクでは、(中略) ここまで来たからにはなんとかナーナイ人に会いたいものと思ひ、街頭にはナーナイ人らしい人をよく見かけるので、思い切って見知らぬ人にふたりほど話しかけてきいてみたのですが、いずれも朝鮮人で、あきらめました。(中略) ナーナイ人の村のハバーロフスクから一番近いのはアムール川を60キロくだったところにあるよし、(中略) ただし外国人は一般には都市のそとに出ることは許されていません。

池上 (2004 [1970] :116-119, 123, 125)

池上先生のモスクワでの研究は1969年、先生が49歳の時である。現在筆者は46歳であるが、すでに50回以上ロシア小村への現地調査を行うことができた。先生が第1回北方研究者協議会を開催した1965年、先生が45歳の時に発表者は生まれた。そして先生が北大を退官された年(1984年)が、筆者北大入学の前年でもある。皮肉なことに翌1985年、ゴルバチョフが共産党書記長に就任し、徐々にペレストロイカが始まった。筆者は大学院1年の年(1988年)に科研費の調査(代表:黒田信一郎)で中国内蒙古に連れて行っていただき、現地調査を開始した。ところが翌年1989年6/4、天安門事件が起こり、調査地は折しもペレストロイカで外国人の渡航が可能になってきたロシアに変更された。こうしてみると歴史の偶然とはいえ、運命的なものを感じずにはいられない。

たしかに池上先生には現地調査の可能性という点で、歴史的に不運なめぐりあわせに当たったと思う。しかし先生はむしろその無念さをエネルギーに変えていたように思う。ずっと調査地に入っていればたくさん調査ができるかという、必ずしもそうではない。動機を高め、周到に準備して狙いを定めて調査地に入ることで得られるものも多い。また実際には、持ち帰った資料を整理することの方に、何倍もの時間と気力と労力を要する。

他方、たとえば池上(2004 [1989a] :15-47)などを読むとよくわかるが、池上先生はかなりの数の地名や川の名前を用いて民族や言語の分布を記述している。たとえ行ったことがなくともその地理的關係や距離、移動の難易度などについて、まるでそれを現地に行き見てきたかのように書かれている。以下に、そのような記述のうち、時間的にも空間的にもスケールの大きな例を一つ紹介する。

宮城県多賀城址にのこる天平宝字6年(762年)の『多賀城碑』に「多賀城 去京一千五百里 去蝦夷国界一百廿里 去常陸国界四百十二里 去下野国界二百七十四里 去靺鞨国界三千里」とあるのは、単にことばの上ではなく、北への行路がすでにあつてのことではなかつたらうか。

これらの交通路は、古来文化伝播の道であり、この通路を通して文化語も伝播したとみられる。この二つの通路の間の地方には、今日北にオロチ族、南にウデへ族が居住するが、ウデへ族の大部分は、日本海沿岸地方でなく、シホタ・アリン山脈の西側のウスリ川右岸支流河川の中流に居住する。この地方は、シホタ・アリンがあつて、後背地と海岸の間に山脈を貫流する川がなく、その間の連絡がつきにくいので、移動の経由地になるか問題である。しかし、ウデへ族の多くの氏族名は日本海岸の地名や河川の名称に由来するところから、かつては多くのウデへ族が日本海側に居住していたとみられる。

池上 (2004 [1987] : 252-254)

このように池上先生の関心は時空を超えた広がりを見せている。下記にみるように、常に客観的で冷静な分析を行っている池上先生であるが、遠い地へと心を馳せるロマンチストの面もお持ちではなかったかと想像する。

1.3. 研究の姿勢

池上先生の研究姿勢は、精密にして広大、慎重にしてかつ果敢なものであった。ここでは、1.3.1. 2子音連続の通時的分析、1.3.2. 精緻な形態論的分析、1.3.3. 果敢な系統的試論、1.3.4. 民族学の重視、などの観点から、それを紹介する。

1.3.1. 2子音連続の通時的分析

まずその精密かつ慎重なことを示す例をあげたい。これは、後でさらに触れるものであるが、ツングース諸語の2子音連続における音対応の一つについての考察である。

対応 32~36 は、それぞれが平行して、エウエン語、エウエンキー語、ネギダル語では、唇音+軟口蓋音、ウデヘ語、ナーナイ語、オルチャ語、ウイルタ語では、逆に、軟口蓋音+唇音である。ただしナーナイ語の一部方言は、反対の順序をとる（アヴローリン、1961、II 参照）。その子音音素の順序の違いは、音位転倒によって生じたであろうことは明らかであるが、それがどこにおきたかについては、

ウデヘ語 bakpi 「わかった」(bap- 「わかる」)

ナーナイ語 jalokpin 「一杯になった」(jalop- 「一杯になる」) (アヴローリン 1959、I 参照)

オルチャ語 jakpin 「食べる」(jap- 「食べる」)

のような、語幹末と語尾の間の音位転倒があることから、これらの語群に転倒がおきたことが考えられる。しかし、祖語において、語により、これら子音連続に二様の順序があったものが、両言語群で転倒がおきて、それぞれ一様化したことも考えられよう。

池上 (1989b: 1073)

ちなみにこの最後の部分は、著作集に採録される際に変更が加えられている。

しかし、祖語において、語により、これら子音連続に二様の順序があったものが、両言語群で転倒がおきて、それぞれ一様化したことも考えられようが、その二様の順序が音韻的対立をなしたかは問題だろう。

池上 (2001: 410)

筆者は最初、語幹末と語尾の間の音位転倒があるのだから唇音+軟口蓋音の順序のほうが古いとみて問題ないではないか、と考え、池上先生の扱いは慎重に過ぎるのではないかと感じていた。ところが少し調べると次のような事実があることに気がついた。

ナーナイ語ビキン方言では、エウエン語などと同様、問題の子音連続は唇音+軟口蓋音の順序をとる。この方言の再帰人称単数に -bi という語尾があるが、「自分の兄」は aagbi (ナーナイ文語などにみられる形) ではなく、aabgi (aa(g) 「兄」) である。つまり語幹末と語尾の間に、上記とは逆の方向への音位転倒がある。したがって少なくとも現時点では、上記の池上先生の記述のように考えておかなければならない。

1.3.2. 精緻な形態論的分析

もう一つ別の例をあげよう。池上先生は、ウイльта語の語幹形成接辞に関する論文で、下記の二つの接尾辞をとりあげている。

-*du*⁻¹ (~ -*tu*-). This suffix expresses 'to return to a former place or state.' It appears after a verb stem. *geuli-du*- 'to row back' (: *geuli*- 'to row'),

-*du*⁻². This suffix expresses 'coming of a season of the year or a certain time of the day.' It appears after an adverb stem. *tuwə-du*- 'winter comes.' (: *tuwə* 'in winter'),

池上 (2001 [1973] :77-78)

筆者（ならびにロシアの研究者）は、これと同語源のナーナイ語の接辞について、両者を同じものとみて記述している。「季節が巡り来る」ということは「以前の状態に戻る」ということの一つであるし、形式が同じであるものを同音異義の2形式に分けるにはそれなりの理由があると考えられる。しかし池上先生の記述を見てみると、さらに接続する語幹の品詞も異なる、という問題があることに気づく。このような場合にどう処理するかに対しては諸説考えられると思うが、これに限らず池上先生の慎重な記述に接して考えを改め直すことは多い。

1.3.3. 果敢な系統的試論

次に池上先生の研究の果敢なことについて触れたい。

少数民族の言語記述を行っている言語研究者には、一言語の一方言しか扱わない者が多い。同じ語族の言語がいくつもあるにも関わらず、一言語の一方言しか扱わない、という研究者も多くいる。池上先生はツングース内部だけでも、上記のような悪条件の中、ウイльта語のみならずエウエンキー語やナーナイ語を現地調査し、文献からも満洲語を研究している。

記述研究のみならず、上に触れたような通時論的研究、類型論的研究（たとえば池上 (2004) [1992]）も行っている。比較研究においては、アルタイ諸言語の3つのグループの相互関係から、さらには果敢にも日本語との関係を考え、具体的な語の比較を行っている。むしろそれはおおざっぱなものではなく、慎重な但し書きの下で展開されたものである。

・・・以上に、同じではないかとみられる語尾ないし接尾辞の比較を試みてきたが、上述のツングース語の動詞語尾、日本語の動詞、形容詞語尾は、それぞれの語形変化（活用）の体系においてかなめのような役割をもつ基本的な要素である。しかし、日本語とツングース語の間に確固とした音韻対応が見出され、全般的に比較研究が成功しないうちは、両言語の部分的な比較研究は一つの試論にすぎないと言えよう。

池上 (2004 [1978] :185)

さらに、系統関係による類似に対して、言語接触に起因する類似というものが考えられる。池上先生は、果敢な比較を行う一方で、言語接触にも大きな注意を払い、具体的な語の伝播についての論考を残されている（たとえば池上 (2004[1980]:195-203), (2004[1994]:204-220)）。

1.3.4. 民族学の重視

さらにその研究の「広さ」という点に関してだが、池上先生の視野は言語学にとどまらない

い。筆者も近年その重要性を深く感じている所であるが、民族学の重要性、言語学と民族学の再統合の必要性を述べている。ここには、「基礎語彙の普遍的意義分析」というような将来的な学問分野についての言及もあってたいへんに興味深い。

なおまたピウスツキの研究分野について言えば、それは言語学と民族学にわたっている。ここでは民族学と言う用語の意味を、民族誌や民俗学もふくめて非常に広くとっていただきたい。言語学と民族学という二つの学問分野が、ピウスツキというひとりの研究者において分化せず一体をなしている。このことは、ピウスツキだけでなく、当時のロシヤの V.G. ボゴラースや L.Ya. シュテルンベルグも、またアメリカの F. ボアズもそうであったろう。その後、研究が進むにつれ、これらの学問は専門化して細分化した。(中略) しかし、そのように進歩してきた今日の段階において、両学問はあらためてそれぞれの研究成果を相互にとり入れ、再び連携し、総合化していくことが必要ではないかと思う。

言語学の側についてみると、たとえば言語の意味の記述、語義の記述を的確におこなうためには、基礎語彙も、少なくとも一面では、その言語の話し手たちの生活、文化に立って考えるべきものであろう。また基礎語彙に関して、人間言語の基礎語彙における普遍性をさぐるようなとき、まず個別言語の基礎語彙をあきらかにすることが前提であり、これの正確な記述は、各言語について民族学的知識に基づいておこなうことが必須であろう。その普遍性の探索もこうして記述された諸言語の基礎語彙を通してなされるべきであろう。

一方、民族学の側を考えると、一民族の文化を理解し、把握するためには、その民族の言語によらざるをえない面が大きい。口碑、神話、宗教、宇宙観については言うまでもない。物質文化についても、一民族の物質文化を体系的に理解、把握するためには、その民族の言語によることも必要であろう。folk taxonomy がわからなければ、一民族の物質文化も十分には理解できないだろう。そのためにも、各文化要素についてその本来の言語における正確な名称を知ることが必要である。

池上 (2001 [1985] :228)

池上先生のこのようなお考えは、山田祥子氏や笹倉いる美氏による諸論考などによって伝統として受け継がれてきていると思う。

さらにここで次のような記述に注目したい。池上先生の民族学への関心は、やはりその背景に「語の由来の究明」というものがあってのものだったと考えられる。

なお、ある単語の由来の究明には、ことばの研究だけでは不十分である。けずり花のついた木のぬさを意味する **ilawun, illau, ilau* の語が、ツングース語内で古くさかのぼりうるものかどうかは、宗教儀礼におけるけずりかすのついた木幣の使用がその言語の背景をなす文化のなかに古くからあったか、あるいは新しい外来文化であったかの問題の究明に関連する。

池上 (2004 [1980] :214)

1.3.5. まとめ

前節でみたように、文化を知ることが、1.3.3. で述べた言語接触の解明にとってきわめて重要である。言語接触による類似と系統関係による類似を注意深く見極めることは、言語の通時論的研究においてきわめて重要である。そして言語接触について考えるためには、現在の民族の分布とともに、過去にどのように分布していたか、その後どのような移動が行われたか、ということについての地理的な把握が必要である。他方、系統関係の証明には、不規則な語形などの形態論的な記述の詳細もきわめて大きな重要性を持つてくる。

このように見てくると、広大な池上先生の関心・研究領域も、「(日本語を含む) 東北アジア諸言語の歴史の解明」という一本の糸でつながっているように感じる。冒頭にも記したように、池上先生の関心の中心はやはり言語の歴史の解明にあったといえることができるだろう。

2. ツングース諸語研究における功績

池上先生のツングース諸語研究は、特にウイльта語という一言語に関する記述研究と、ツングース諸語全体に関する比較研究に分けることができる。さらに若干であるが、ツングース諸語と他の系統を異にする言語との対照・類型論的研究が見出される。

2.1. いわゆる言語記述における3点セット、なかでもテキストの収集と刊行

日本で少数民族の言語記述を行っている（もしくは行った）言語研究者は、決して多いとはいえないものの、ある程度の人数に達している。しかし、文法記述、辞書、テキストのいわゆる「3点セット」を公刊している研究者はそれほど多くないと思われる。池上先生はその一人である。文法記述のみを書いている研究者はある程度いる。しかし辞書やテキスト集も出している研究者となると途端に減る。文法記述と語彙集、もしくは文法記述と若干のテキストを出している研究者はわずかにいるように思う。しかし3つ揃って出している人となるときわめてまれではないだろうか。

辞書は単なる語彙集ではなく、例文を含んでいることが大切である。それも多ければ多いほどよいだろう。池上(1997)『ウイльта語辞典』は例文を多く含み、日本語からの索引、分野別の語彙がある点でもきわめて有用である。

しかし、筆者は池上先生がテキスト(池上(2002a, 2002b))を刊行されていることを最も重視したい。したがってここではテキストの刊行がどのような重要性を持っているかについて、具体的に述べたいと思う。

山田(2007)はウイльта語における後置文(通常語順から逸脱した文)についてのすぐれた語用論的研究である。その研究方法は、池上(2002b)を資料としたコーパス研究であるといえる。山田自身はその時点ではウイльта語についての現地調査を行ったことはなかった。池上先生は、ウイльта語をはじめとするツングース諸語の研究において、統語論や語用論のような研究はあまりなさらなかった。筆者が書いた修士論文(風間(1994)として刊行)を御覧になった時も、「私はこうした方面のことはやっていないが、今後は君のしたような統語論的研究もまた必要であろう、」というような主旨のことをおっしゃって下さった。一人の研究者が可能な研究の範囲にはおのずと限界があり、また学問の進歩や新しい視点の開拓によって、これまでは考えられなかった観点からの言語研究も可能になってくる、ということがあるだろう。このような時、消滅の危機に瀕した(もしくはすでに消滅した)言語のテキストが残されていることはきわめて重要である。山田(2007)はその一つの好例であると思う。

そのテキストとともに、そのテキストの音声データが残されていればさらに貴重である。池上(2002b)には音声CDが付加されている。音声データがあれば、例えばイントネーションの研究を行うことができる。音響音声学的な機材やソフトの発達によって、音声データつきテキストの価値はさらに高まるだろう。

まとまった量のテキストがあることは、言語の復興にとっても重要である。ヘブライ語は二千年の時を経て復活したが、これには旧約聖書の存在が大きな役割を果たしたといわれている。筆者は、ナーナイ語とウデヘ語に関しては拙いながらも運用能力があり、現地ではコンサルタントと会話したりすることが可能である。振り返って思うに、これは長年そのテキストの聴取、書き起こし、分析、聞き直し、というプロセスを行ってきた中で培われてきた

ものであると思われる。したがって、十分な量の音声付テキストが残されていれば、言語の再活性化や復興も決して不可能なことではないと考える（むしろ容易なことではないが）。一方、そもそもそのような資料が存在しなければ、言語の復興は全く不可能である。

こうしたテキストの重要性については、すでに多くの指摘があるが、ここではさらに渡辺（1996）の記述を示しておきたい。

ボアズの研究態度の中枢をなしたと考えられるのは、自らが「分析的」(analytical) と呼んだ記述方法である。ボアズがこの方法をもっとも明確に打ち出したのは、文法の記述においてである。ここでボアズの言う分析的記述とは、他の言語に用いられた分析方法をある言語に外から押しつけるのではなく、その言語自体の内からの分析によって得られる記述を指す。（中略）ボアズは、調査者とインフォーマントの間のこの関係を逆転させ、内からの記述をするために、彼ら自らに語らせるという方法をとった。すなわち、テキストの蒐集である。（中略）ボアズは、テキストの蒐集のみならず、それをそのままの形で公にすることにも精力的であった。われわれはそこにも、研究者の主観と早急な一般化を排除しようとするボアズの姿勢をみることができる。すなわちボアズは、資料の一部のみを公表することは、必然的にそこに研究者による主観的な選択の介入を許すことになると考え、これを避けたのである。そして、集めた資料をそのまま提示することは、蓄積した資料をして語らしめるというボアズの方法であったと同時に、将来の研究者が常にそれを利用できるようにすることをも意味した。ボアズによって出版されたテキストが、主なものだけでも 5,000 ページにもなる量 [White 1963] になったことには、このような背景がある。このような提示の仕方は、膨大で未整理な利用しにくい資料を残すことになり [Walens 1981]、それを強く批判する研究者がいたことは事実である。（中略）ボアズ（とその教えに従った弟子たち）が収集したテキストは、現在も、新たな分析が施され、そこに当の調査者の気がつかなかった現象が発見されうる貴重な資料となっている。ボアズの資料を言語学的に分析した研究は枚挙にいとまがない。（中略）例えば、ヨヘリソンの蒐集によるイテリメン語 (Itel'men : チュクチ・カムチャッカ語族) のテキストは、同言語の辞書 [Worth 1969] の基となった。」

渡辺 (1996: 145-153)

ここでボアズについて述べられていることの多くは、上述のように、池上先生の仕事についても当てはまるだろう。また、文法記述、辞書、テキストの三者が密接な関係にあり、そして中でもテキストこそが、帰納的・客観的な文法記述や、例文を多く含んだ辞書の基となりうるということがわかる。文法形式の出現頻度や前後の文脈における機能、などといった問題の解決にも、テキストの存在は大きな意味を持っている。

池上先生のテキストが話し手の言い間違いに至るまで、なるべく忠実に再現しようとしたものであることは、先生のテキストそのものを少しでも見ればわかる。言い間違い、というものも決して無駄なものではない。これは話し手にとってその文脈から想起される別の語や、機能的に近い文法的形式、それらの間の関係、といったことを解明する重要な手掛かりとなりうる。不完全な（不完全と思われる）語形や語形のゆれ、音の縮約なども、各音素のより詳しい記述のヒントとなる。フィラー（間つぎの要素）もまた重要である。これは付属語であるか否かの認定などにも役立つ。池上先生がこのようなことを意識してテキストを作成していたことは次のような記述から窺われる。

表記については、それだけで語形をなすとは思われない断片的な音は表記しない。しかしそうした音でも、ある語形の言いそこないとみられるものは表記して注をつけたが、ただしその語が正しい形

ですぐあとにあらわれる場合やその語がよけいな語であるとみられる場合は表記しない。なおある語形のはじめの一部とみられる音は表記した。

なお注記で、ある語がよけいな語であるとか、ある語のかわりに別のある語があるのがよいと記してあるのは、発話を結果的にみた上のことである。それは話し手の言いあやまりによる場合もあろうが、また話し手が発話中にその語とつぎの語とのあいだで表現のしかたや内容を変更したことによって文脈上前後が結びつかぬばあいもあろうと考えられる。

池上 (2002a [1986] :7)

このように重要な意味を持つテキストの作成だが、実際に刊行されるテキストは決して多くはない。その理由は次の二点、すなわち：①多くの時間と根気を必要とする、②あまり評価されていない、ためである。特に②は残念なことであり、この風潮が改善されていくべきであろう。

筆者は修士論文執筆中のある時、現地に長く滞在していたが、なかなかおもしろい文法現象を発見することもできず、大きなあせりを感じていた。目の前に話者たちがいてその言語を話しているのに、何も発見できないのである。elicitation もやってみたし、いろいろ試行錯誤した結果、テキストの収集・書き起こしを開始した。そしてその後はそれが中心の時期がかなり続いた。池上先生のテキストを見ていたので、テキストの作成そのものも一つの重要な仕事である、ということを知っていたことが大きな励みになっていた。そしてこれなら私にもできるのではないかと考えたのだった。そうでなければおそらくやり続けられなかったと思う。

テキストの作成は、上記のようにきわめて面倒くさい作業であるが、今思うと「急がば回れ」の格言にあるごとく、多くの実りある研究成果に至るためのむしろ最短の道であったと思う。したがってこの点でも池上先生に深く感謝する次第である。

こうしたテキストの作成も、特に北方の諸言語の多くの研究者たちによって、池上先生の遺志が継承されてきているように思われる。たとえば白石英才氏によるニブフ語の一連のテキストをあげることができる。

2.2. ツングース諸語全般に関する研究

3点セットによるウイльта語の記述とともに、池上先生がなされた重要なお仕事は、さらに、ツングース諸語内部の関係の（主に通時的）解明、ツングース諸語と他の言語（群）との比較・対照へと広がっている。本稿では、それぞれについて1点ずつ、筆者が重要であると考えた池上先生の指摘をとりあげることにする。

2.2.1. ツングース諸語内部の通時的解明

この問題については、池上 (2001 [1989b]) によってその全貌を知ることができる。紙幅の都合上、その価値ある指摘を逐一論じてゆくことは到底不可能であるので、詳しくは池上 (2001 [1989b]) 自体を参照されたい。その中で最も重要なものを一つとりあげるとすれば、それはやはりツングース諸語の分類であろう。池上の分類において重要な点は、池上先生御自身記していられるように、「ウデへ語とオロチ語が1群をなし、他の3群と区別されている」(池上 (2001 [1989b] :441-442)) ことである。その根拠は音韻対応 48, 49 (祖語や他の言語の多くで (*)lt, (*)ld となっているものに対し、ウデへ語とオロチ語では kt, gd が対応するもの) である、としている。

しかしこの分類は、次にみるようなツングース諸語の話し手の移動の歴史に関する推定に

とつても、きわめて重要な意味を持っている。

ツングース祖語の母音間における *-r- が、ネギダル語では -j- に変化した。オロチ語では -j- に変化したか、または消失した。ウデヘ語でも消失した。しかしナーナイ語、オルチャ語、ウイルタ語、その他のツングース諸語では r のまま保存されている。*-r- に同じ傾向とみられる音韻変化がおきたという点でネギダル語、オロチ語、ウデヘ語は他のツングース諸語と異なる。この音韻変化は、かつてネギダル語の話される地域とオロチ語、ウデヘ語が話される地域が連続していてそのひとつづきの地域だけにおきたもののように思われる。もしそうならば、ナーナイ語、オルチャ語、ウイルタ語の三言語の分布は、アムール川に沿って、あるいはキジ湖地域を横断して、ネギダル語の地域をオロチ語、ウデヘ語の地域から分断して進出したようにみられる。

池上 (2004 [1989a] :34-35)

*-r- の脱落が「ひとつづきの地域だけにおきた」理由について、池上先生はそれ以上の明言を避けているが、この地域にあった何らかの基層言語の影響を考えていらしたのではないかと想像する。

2.2.2. 他言語との比較・対照

すでに述べたように、通時論的な比較においては、他のアルタイ諸言語から日本語に至るまで広く東北アジアの言語との対照を行っている。他方、類型論的・対照言語学的考察を行っているものは多くないが、重要な論考に北アジアの主体と客体を示す構造を扱った池上 (2004 [1992]) のあることが注目される。これは系統的に大きく異なる北アジアの 10 の言語について、その客体表示のしかたを対照したものである。大きく見れば、その表示は、名詞の側での対格による言語群における表示法と、動詞の側での主客体活用による言語群における表示法に分かれる。池上先生は使用されていないが、**Dependent Marking** の言語群と **Head Marking** の言語群と言うことになる。しかし多くの類型論研究者による対象とは異なり、池上先生の対照の仕方はていねいで、個々の言語での状況を細部まで疎かにすることなく描写している。これを読んで筆者が強く感じるのは、統語表示に対する情報構造の関わりの重要性である。

チュクチ語やエスキモー語では対照が具体的 (限定的) であるか、相対的 (不定的) であるかによって、主客体活用になるか主体活用になるかが異なってくるという。プリヤト語では、対象が不定的で動作が対象の部分だけにおよぶ場合には、その名詞はゼロ接尾辞をつけた斜格語幹で現れる。ハンティ語では、動詞の示す動作に対して限定的な対象があるかないかによって、動詞が限定活用 (客体活用) を行うか、不定活用 (主体活用) を行うかが異なってくる。ユカギール語において、述語活用による構文では述語動詞に論理的力点があり、主体活用では主語に、客体活用では目的語に論理的力点があるという。

日本語の助詞「ハ」や「ガ」に関する議論でもそうだが、一般に統語論と情報構造の問題は切り離されて扱われている。これはたしかに **subject** の語で主題と主語を混同していた時代から見れば大きな進歩である。しかし「ニハ、デハ、カラハ」などのようにふつうは格助詞と係助詞の連続が可能であるのに対し、「*ガハ、*ヲハ」は存在せず、両者の分布の位置は完全に異なるわけではない。

したがって、単に **Dependent Marking** の言語群と **Head Marking** の言語群に分けて満足しているのでは不十分であるし、さらに情報構造を含んだ形での (統語表示に関する) 言語の類型というものを考えていかなければならないと考える。このような点でも池上 (2004

[1992]) は示唆的な論文である。

3. おわりに

ツングース諸語に関する池上先生の研究の全体的な傾向と具体的な功績について、若干の考察を行った。まだまだ取り上げるべき池上先生の重要な指摘は多くあることと思う。浅学の筆者による恣意的でありまた不十分な検討に対して、天国の池上先生が御容赦されることを願いたい。

参考文献

池上二良

- 1963 「tongki Fuka Akū Heregen i Bithe とそのウランバートル刊本」池上 (1999) に所収：216-225 [初出：『言語研究』48号：46-52 日本言語学会]
- 1965 「ふたたび満洲語の諺文文献について」池上 (1999) に所収：43-52 [初出『朝鮮学報』26号：94-100 朝鮮学会]
- 1970 「北方言語の調査」池上 (2004) に所収：112-131 [初出『月刊言語』7巻9号：72-74 大修館書店]
- 1978 「アルタイ語系統論」池上 (2004) に所収：135-192 [初出『岩波講座 日本語 12 日本語の系統と歴史』：35-98 岩波書店]
- 1980 「アイヌ語の輪郭」池上 (2004) に所収：195-203 [初出『民族学研究』38巻2号：180-181 日本民族学会]
- 1985 「ウイльта語・オルチャ語研究における B. ピウスツキ」池上 (2001) に所収：222-231 [初出『国立民族学博物館研究報告別冊』5号：275-282 国立民族学博物館]
- 1986 「ウイльта口頭文芸原文集」池上 (2002b) に所収：1-153 [初出『ウイльта口頭文芸原文集』 北海道教育委員会]
- 1987 「北方諸言語と日本語の古層」池上 (2004) に所収：244-258 [初出『月刊言語』16巻7号：104-117 大修館書店]
- 1989a 「東北アジアの土着言語とその分布」池上 (2004) に所収：15-47 [初出 三上次男・神田信夫編『民族の世界史 東北アジアの民族と歴史』：125-161 山川出版社]
- 1989b 「ツングース諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻』東京：三省堂
- 1992 「北アジア言語の動詞の構造と格支配 ー動作対象の表示に関してー」池上 (2004) に所収：49-66 [初出 宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』：297-313 東京：三省堂]
- 1994 「アイヌ語のイナウの語の由来に関する小考」池上 (2004) に所収：204-220 [初出『民族学研究』44巻4号：393-402 日本民族学会]
- 1997 『ウイльта語辞典』札幌：北海道大学図書刊行会
- 1999 『満洲語研究』東京：汲古書院
- 2001 『ツングース語研究』東京：汲古書院
- 2002a 『ツングース・満洲諸語 資料訳解』札幌：北海道大学図書刊行会
- 2002b 『増訂 ウイльта口頭文芸原文集』吹田：大阪学院大学情報学部
- 2004 『北方言語叢考』札幌：北海道大学図書刊行会

風間伸次郎

- 1994 『ナーナイ語の「一致」について』北大言語学研究報告第5号 札幌：北海道大学言

語学研究室

津曲敏郎編著

2003『北の言葉 フィールド・ノート [18の言語と文化]』札幌：北海道大学図書刊行会
山田祥子

2007「ウイльта語後置文の機能論的分析」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』14, 87-102. 札幌：北海道大学大学院文学研究科

渡辺己

1996「第6章 テキストの蒐集と利用」宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』143-157
京都：世界思想社

Ikegami, J.

1973 Orok Verb-Stem Formative Suffixes. 池上(2001)に所収：73-93 [初出『北方文化研究』7号：1-17 北海道大学文学部附属北方文化研究施設]

On the Works in Tungusic Languages by Prof. Ikegami

Shinjiro KAZAMA

Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

This paper consists of two parts. I considered the general tendency of the investigation by J. Ikegami in section 1, and his concrete contribution in the study of Tungusic languages in section 2.

In section 1 I pointed out his interest in the historical study about the development of the languages of north-east Asia (section 1.1.), and his wide interest in the many languages geographically widespread in this area (section 1.2.). His attitude toward the study of languages is always rigid and with wide view.

I described his attitude toward the study through the following points: diachronic analysis on the correspondences of two consonants in the middle of words (section 1.3.1.), elaborate analysis in morphology (section 1.3.2.), challenging hypotheses on the historical relationship between Altaic languages and Japanese (section 1.3.3.) and his respect for ethnology (section 1.3.4.).

In section 2, firstly I introduced his works on Uilta (one of the Tungusic languages) which consists of the dictionary, the grammar and the texts (section 2.1.). Especially I emphasized the value and the importance of his texts. Secondly, I examined his concrete contribution on the genetic problems in the Tungusic languages (section 2.2.1.) and on the typological and contrastive study among the languages of north Asia (in section 2.2.2.).